コミュニケーションとしてのダイアログ・ジャーナル

土谷　宣子(東京都立松沢看護専門学校)

はじめに

看護専門学校生の第一の目標は国家試験に合格して、資格を取得することにある。そのため、病院などでの実習を含む専門科目の学習課題に追われて、国家試験に含まれない英語の授業には十分な力を注ぐ余裕の無いのが現状と言える。しかし、日本語を話すことができない患者の増加に伴って、看護教育における外国語教育の必要性は学生にも認識されている。こうした状況下での ESP(English for specific purposes)としての英語授業の主要な目標はコミュニケーションにあり、専門用語を含む実用的な英語を実際に使うことができるようにすることにある。コミュニケーションには“話す”のみでなく、“書く”と言う形態も加えられ、正しいコミュニケーションの力をつけるためには、読む、書く、聞く、話すの４つのスキルが不可欠であると筆者は考える。

Teaching Context

対象学生:　基礎科目英語二年生　２クラス６１名(内、男子学生７名)

年齢：１９～３９歳(１９歳－４０名、２０歳－９名、２１～３０歳－８名,３０代－４名)

学歴：大学卒５名、短大卒３名、高校卒５３名

教科としての英語：嫌い２３名、普通２９名、好き９名

この三年制看護学校の生徒の年齢、学歴および職歴は多岐にわたる。全員が６年間の公式な英語教育を受け、英語の基礎的な知識は既に習得しており、教師中心での、英文和訳、和文英訳、ドリル的演習には、慣れている反面、英語を自分の意見、考えを述べるために使い、自発的に発言するということに慣れていないと言う共通点が見受けられた。礼儀正しくまじめな看護学生の授業態度に対する第一印象は positive というより passive なまじめさなのではないかというものであった。約６０名の１クラスを２つのクラスに分け、二人の日本人講師が同じ教科書[Graded reading and conversation series for nurses: Grade 2 Caring for patients(1995).医学書院]を使用し、ほぼ同じカリキュラムで９０分の英語授業を行っている。基本的に合意された教案の骨子は以下のようなものである。

１．教科書 reading part のグループプレゼンテーション(約２０分)
２．教科書 dialogue part をテープで聞き、pair practice & role play (約２０分)
３．教科書 exercises（約１５分）
４．Special activity: On culture, newspaper clip on medical subject, songs etc（約２０分）
５．Journal entry（５～１０分）

Dialogue Journal

ここでいうジャーナルとはダイアログジャーナルで、教師が学生の書いた英文の学習日誌に英文で返事を書き、感じたこと、質問、意見からなるフィードバックを通して学生と直接コミュニケーションを図るものである。writing の評価の対象としてではなく、今迄

に習得した英語を使い、意思疎通に実際に役立てると言う点に主眼を置いている。以下の研究は前期１６回、後期７回の授業中に書かれたジャーナル及び一回目の授業時と夏休み前１６回目の授業日に行ったアンケートに基づいている。

ダイアログジャーナルの発展例

このジャーナルライティングはほとんどの学生にとって初めての課題であったため、「今日の授業を理解できたかどうか、興味を持った点、新しく学んだこと、その他」がジャーナルを書き出す手がかりとして提示された。しかし、初期のジャーナルは

1) I understood. 2) I enjoyed reading. 3) Each country has its own culture. 4) Nothing.(4/16)

というような１文で終わる形式のものが多く対話になりにくかった。そこで、できるだけ自由に書けるよう、またそのために、教師からの返答の中に、授業開始日に行ったアンケートを参考とし学生のコメントをひきだせるような質問を含むようにした。

次に平均的な学生のジャーナルがダイアログジャーナルの形態に移行していった例を示す。(イタリックは筆者のコメント)

5/7　1. I understood.　2. DIALOGUE　3. Lesson 3　4. Nothing

You like music, right? What kind of music do you like? Who is your favorite singer?

5/14　I like music. I sometime play sax. It is difficult but is interesting. I become refresh.

I have never played saxophone. You're great! Did/Do you take a saxophone lesson? Please continue your journal in this way.

5/21　I take a saxophone lesson. High school in OB band. I want to continue.

That's nice. Can you play any other musical instruments?

5/28　No. I cannot. When I child, I want to play piano. But mother didn't meplaying piano. Because room is small.

I have a similar experience. My parents couldn't afford a piano. So, I took a vocal music lesson when I was a child.

次のジャーナルではこの学生から会話を始めている。

6/14　I like Karaoke. I sometimes go Karaoke box with friends. I blow off the stress and enjoy. I'm busy so I can't go very often. Do you go to Karaoke?

学生の書くジャーナルには上の例にも見られる通り、英語として間違いがふくまれる。しかし、この段階では、まず自由に安心して英語を使えるリスク・フリーな環境を作ることに留意し、間違いの取り扱いは学生の間違いを直接訂正するのでなく、教師の返答の中で正しい形やつづりを使うことによって対応した。

ジャーナルのもつ意義

５月中旬頃になると、ジャーナル自体のコミュニケーションとしての価値を学生・教師ともに認識するようになった。学生はジャーナルに授業での問題点、疑問点を書くようになり、しばしば、こうした問題点は多くの学生に共通であり、次回の教案にその対応が含まれ、カバーされるということが可能になった。学生は教科書の中の表現やことば、及び、教師の返答の表現などを積極的に使い出し、この短いジャーナルライティング活動に教育的効果が顕著に見られるようになってきた。

このような流れは Stevick(1980)や Allwright and Bailey(1991) のいう、「教室内で何が行われているかを明確に把握することが、教材、テクニック、最新のメソッド、言語学上の分析より、学習者のために重要である」とする見地に合致するのである。

４月には上記例のような１文のみの短いジャーナルを書いていた学生が、教科書５課の"Baths"に関して５月に以下のように書いている。

5/21 I think the way of bath is little different between U.S hospital and Japanese one. For example, the partial bath is not for the convalescent patient but for the acute patient in Japanese hospital. I wonder why most Americans are sensitive about their baths. Probably I think in America there aren't public bath.

この頃になると短時間の内に少し長い文章を書き出しているだけでなく、自分の考えを述べている学生の数が増加してきた。同時に以前より流暢にかつ正確な英語でジャーナルの中でしゃべり出す学生も増加した。

6/18 This was last Sunday. I was at Shinjuku station. A foreign family asked a station staff something. But the station staff can't speak English or other foreign language. I said, "may I help you?". The father said, "Oh! Thank you very much. I'm going to go to Tokyo Disney Land. This is Keiyo line, isn't it?" I said, "This is the Keio line, it is not Keiyo line. You must go to Tokyo Station by JR Chuo line". Then, I took them to JR Minamiguchi. This was very interesting and happy accident.

ジャーナルには学生からの授業に対する提案なども含まれるようになってきた。筆者も既に考えていたことであるが、学生からジャーナル・シェアリングの提案があり、以後二回、約４０名のジャーナルを教師が選び、タイプしたものを教室内の壁に貼り、それを学生達が読むという形でお互いがどのようなジャーナルを書いているのかを分かち合った。

アンケート結果と検討

Table 1: ジャーナル・ライティングの感想

大変おもしろかった	9 （人）	14.8（%）
おもしろかった	36	59.0
むずかしかった	12	19.7
面倒だった	4	6.6
合計	61	100.0

７３%の学生がジャーナル・ライティングはおもしろかったと述べている。おもしろいと感じた点は多岐に亘っているものの、全体として教師とのコミュニケーションができたという点をその理由にあげている。１２人の難しかったと書いた学生の中にも、積極的にジャーナルを捉えている学生が含まれる。

Table 2 ジャーナルライティングで難しいと感じた点（複数回答）

語彙不足	１６(人)	２２．２%	書く時間の短さ	６（人）	８．３%
日/英の表現の違い	１３	１８．１	綴り	２	２．８
文の構成	１２	１６．７	難しい点なし	７	９．７
トピック	８	１１．１	無効解答	２	２．８
文法	６	８．３	合計	７１	１００．０

この点で共通しているコメントは、文法、単語がよくわからないので、英語で文が書けないというもので、まず、日本語で文を考え、それを英訳するという作業が行われていることを示す答えであった。

Table 3: Teacher's Comment について

必要	５３（人）	８６．９（%）
不要	３	４．９
無回答	５	８．２
合計	６１	１００．０

ジャーナルへの動機づけは教師の返答に対する期待又は不安にあり、自分達の書いたものへの教師の対応に大きな関心を示している。当初は自分の書いたものを読者・教師が理解できたかどうか不安だったが、"I now realize that I am communicating with teacher through the paper. I am now writing what I am thinking in my own word."又は"I try to communicate what I want to tell in whatever way I can."というコメントに表現される通りジャーナルは意思伝達に、役立ったと認識を深めている。

まとめ

多くの学生にとって、英語をコミュニケーションの手段として使うのは始めてだということであった。上記数例に見られるように、学生のジャーナルは英文としての完成度は決して高くないものの、読み手と書き手の間の意思疎通には充分に足りるものである。一方、「先生や友達がどのように考えているかを知ることができ、自分だけで考えている時より、広い視野を持つことができた」という数人の学生のコメントから、言語学的な要素よりダイアログの内容に関心をもっていることがわかる。また「英語が得意でないので、先生からのことばにずいぶん励まされた」というような教室内で自分の意見を言うことができない内気な学生、自分は英語ができないからと言う理由で、積極的にクラスに参加できない学生は、ジャーナルの中でのほうがより自由に自分の考えを表現している。

教師からのコメントは上のアンケート結果にみられるように学生の必要としている動機づけに役立っている。同時に、教師の書くコメントの質と量が学生の書くジャーナルの質と量に影響を与えている。教師にとっても、学生に英語を使ってものを考える事を誘い出すような明瞭なコメントをいかに書くかというかなりのteacher-educationの要素をもつ。

ジャーナル・ライティングの目的は、教師と学生のコミュニケーションにあることは明白である。しかし、この活動は学生中心の授業には不可欠な、Palmer が７５年以上前に指摘した学生と教師の和(cited in Howatt, 1984)を生み出す結果になった。前述教案に見られる通り、学生中心の授業展開を意図して１）教科書読解部分のグループプレゼンテイション、２）会話部分のロールプレイを行った。しかし,予期に反して、短いジャーナルライティングが、異なった経歴と英語の能力を持った学生で構成されるこの英語のクラスを、学習者中心のクラス作りに最も貢献した。

今後の課題としては、ジャーナルライティングを英語能力の向上にいかに結び付けていくか、各学年の英語講師間の密接な連携により、その有効性について共同研究の必要性を感じる。

参考文献

Allwright, D. & Bailey, K.M.(Eds.) (1991). *Focus on the language classroom.* Cambridge: Cambridge University Press.

Howatt,A.P.R.(1984).*A history of English language teaching.* Oxford: Oxford University Press.

Stevick, E.W.(1980). *Teaching languages: A way and ways.* Rowley, MA: Newbury House.